

蒼い実験室

蒼い実験室

ポケット文春 116

1963 年 7 月 20 日 初版発行

定価 280円

著 者 ^{みな}水 ^{かみ}上 ^{つとむ}勉◎

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえいたします

蒼い実験室

推理長篇

水上勉

文藝春秋新社

蒼い実験室・目次

第一話	風 船 殺 人 事 件	5
第二話	娼 婦 の 死	87
第三話	幽 鬼 の 湖	125
第四話	河 岸 殺 人 事 件	207
第五話	消 え た 週 末	253
第六話	おけら詣り殺人事件	291

装幀・伊藤 明

蒼い実験室 第一話

風船殺人事件

東京都台東区蔵前通りは、小間物雑貨洋品卸問屋の町である。混雑した都電通りの問屋街から隅田川の方へ横道をそれると、ここらあたりは、急にひっそりした一角になる。いかにも下町らしい面影のある黒板塀に囲まれた古い家だとか、格子戸のはまったしもた屋などが並んでいて、細い露地に、隅田川を逼^ひいあがってくる嫌な臭いが立ちこめていた。

事件のあったその店は、厩橋に近い川岸から、五十メートルほど離れた通りに面している。「坂根ラテックス商会」と横書きにペンキで書かれた看板があがっていたが、附近の人びとは、何をつくって売っている商店だか、詳しいことを知る者はなかった。

間口四間に、奥ゆき五間ほどしかない四角い二階家である。あるいは、蔵前の表通りの雑貨屋などの、下

請仕事でもしている店なのか。ラテックスという片仮名の字が、すぐゴムの原料液を意味することなどについて、考えてみる者もありなかった。

主人は坂根吉太郎という名であった。戸口の軒下に木製の表札を掲げていたが、いつも閉め切りにしているスリ硝子の戸をあけて入ると、六畳ぐらいの床を張った店ができていて、そこには白布をかぶせた古ぼけたソファと椅子が三脚ほどあり、帳簿をつけるための小机が、窓に向ってぼつんとおいてある。それだけの殺風景な、がらんとした内部である。

しかし、この表の間から、仕切りをあけて奥に入ると、そこでは、六、七人の少女が昼でも電燈をつけて細長い机に向きあって立っている。うす暗い奥の乾燥機から送られてくるゴム風船を、いちいち口につけて息をふきつけてみていた。空気のもれないようにふくらませてみたり、赤や青の染色のまだらなものや、ゴム地のムラが出ているものなどを、こまめに撰^{せん}りわけているのであった。少女たちの中にはお下げ髪の子もまじっていた。みたところ、新制中学を卒業してまも

ない年ごろの子ばかりである。陽あたりの悪い湿気の多い部屋の中で一日じゅう働いているため、蒼白い顔だったし、どの子も背が低くて、陰気な感じがした。

おひる休みがくると、少女たちは、陽ざしのある表の軒下に集まって、何やらぼそぼそはなしていたけれど、町を通る人びとと口をきく子もなかった。

「何をつくってるんでしょうね。朝からとんとん机をたたくような音がするんですよ」

隣家の手島という家では、壁をへだてて少女たちが作業をする音をきいていたから、だいたい見当がついていた。初めは、函の下貼りか何かをする町工場かと思っていたが、ときどきアンモニアの強い臭気が流れてくるのには閉口した。

「女の子たちにききますとね、風船と手袋をつくってるっていつてますよ」

「へーえ、手袋って、軍手か何かですか」

「いえ、あんた、ゴム手袋ですよ」

きいていた人は、びっくりして、

「あんなせまい店で、ゴム手袋がつかれるんですか」

とあきれた。常識では、もっと機械化されて製造されねばならないと思われていた、ゴム手袋や風船などというものが、せまいしまた屋の奥で、簡単な手工業でつくられるということは意外に思えたのだ。

事実、ときどき、店の前に小型トラックが停ることがあった。大きなドラム罐が運びこまれた。アンモニアの入った大瓶ももちこまれるのをみたことがある。材料といつてはそれだけで、ときどき、白い粉末状のものが大きな紙袋に入れられて、配達されてくる。しかし、それくらいが持ち込まれるものの全部であって、人の出入りのすくない店といえた。

主人の坂根は、三十二、三のひょろりと背の高い男で、しゃくれた顎の細長い顔をしていた。いつも蒼い顔をしているせいもあって、角ばった眼つきにも、どこことなく陰険なものがある。彼はまだ独身だった。この主人は、少女たちのほかに、もう一人、四十すぎの小人のような背のひくい、せむしの職人をつかっていた。高橋というのが、この職人の名前だった。高橋は奥のうす暗いタタキで、ゴムの原料液を色染めしたり、

硫黄やアンモニアを混入する攪拌作業を受けもつていた。いつもぬれた手をしている。手袋にしても、風船にしても、製造は簡単だった。

処定の色粉で染色したラテックス原液に、粘りをよくするために硫黄を入れ、これにガラスでつくられた型を挿入すれば、もうそれで製造できる。型の表面に附着した液を乾燥させると、表皮についたゴムは弾力性を發揮しはじめて、くるくると手で廻してはがせば、もうそれで、風船なり、手袋なりが出来る。

せむしの高橋が、水やアンモニア液でぬれたタタキから、板の上にのせてはこんでくる風船や手袋を、少女たちがよりわけける。これに白粉（雲母粉）をふって包装紙にくるんだり、函に入れたり、あるいは宣伝用の文字を書きこんだりして仕上げるのが、作業の大半といえた。

隣家の手島の家では朝から晩まで、少女たちが机の上をトントントンとたたく音をきいている。それは風船に粉をふる時の音である。ときどき、ぱんと何かがはじけるような音もきいている。

風船のはじける音らしかった。

2

「坂根ラテックス商会」へ、まだ二十六、七と思える白い餅肌の大柄な女が住みつくようになったのは、事件の起きるわずか三カ月近く前のことである。六月はじめの梅雨空のうっとうしい日であった。どこで式をあげたものか、陰気な顔をした坂根吉太郎が、その女をつれて、近所に挨拶まわりをした。坂根は隣家の手島の家にもきて、新妻を紹介している。

「たね子といいます。結婚しまして、今日から家にくることになりました。これまでは、私一人でつい忙がしいものですから、皆さまともお付き合いひとつできなくて……しかしこれからはこの女が参りましたんで……よろしくおひき廻しのほどお願いします」

鄭重な挨拶といえた。坂根は、背のたかい白い顔をした、たね子というその女を手島の細君の前へ押しだすようにして、ペコリと自分も頭を下げた。

色白で、美人というほどでもなかったが、造作の大きいのが目立つのだった。どこかおうような感じがした。五尺五寸ぐらいはあるかもしれない。小鼻の大きな、すこし、上向きになった鼻にも愛嬌のようなものがあつたし、気はすかしそうに、赤い菊模様の単衣の裾に手をかきねてお辞儀して廻る女を、町内の人びとは奇異な感じで眺めていた。どこで、こんな体格のいい女を見つけてきたのかと、坂根吉太郎の貧相な細長い顔を横眼でみて、不思議に思うものもいたほどだった。

「よろしくたのみます」

と坂根たね子はひくいがよく透る声でいって、曇り空の町の通りを歩いて廻った。どこかその歩きぶりに、バアか飲み屋で働いていたような過去の匂いがないでもなかった。とにかく「いいお嫁さんですよ」と町の人びとはいった。

その町の人たちがいったとおり、坂根の新妻たね子は、人づきあいはよかった。隣りの手島の細君の安子と一ばん早く仲よしになった。

「ゴム手袋をつくってらっしゃるんですってね」
と手島安子はきいた。

「ええ、でも、うちのようないくさい規模では、大きな工場の製品に負けてしまいます……お得意さまも減ってゆくばかりで困っておりますのよ。でも、風船の方は、まだしも注文がとだえるってことはございませんけど」

「やっぱり風船も、おうちで……」

「はい、近ごろは薬局さんや、子供服の間屋さん等まで、お子さんに宣伝用の風船をさしあげたりなさっていらしてね。デパートなんかも、売り出しがあるたびに大急ぎの注文がまいりますのよ。てんでこまいをすることだってございますわ」

とこの新妻は、人の好きそうな眼をまともに手島安子にむけて透る声で喋べった。もう「坂根ラテックス商会」の経営者の妻となった顔がそこにあった。

嫁入りして来た当時は、坂根たね子は蔵前通りにもちよくちよく買物にでかけて、手島の細君などとも一しょに帰ってきたものだが、しばらくするとどうい

うわけか、あまり表に出なくなった。

たね子と主人の寝ている部屋は、二階の表に面した六畳らしく、ときどき、窓があげっぱなしになっていた。向い家の鈴木という歯医者者の二階から、紅い布のたれた鏡台や、陽焼け止めの唐草模様の風呂敷地で覆ったタンスが壁ぎわにみえる。たね子のものでらしい着物が裏がえしにされて、衣紋竿にかけてあるのがみえたりしていた。しかし、最近、暑いのにその窓が閉めきりになっていた。町の人びとは不審に思った。

「お隣りの奥さんも、このごろはすっかり見かけなくなりましたね」

誰かが手島安子にきいた。

「そういえば、見かけませんね」

「家にいなさることはいなさるですよ。どこか、軀でもわるいんじゃないんでしょかね」

「立派な軀をしていらっしゃるから、病氣ってことは考えられませんよ」

と手島安子はいった。しかし彼女は氣にかかったので、その日、電車通りの魚屋で買ってきた特売品の鰻

の生干しを紙に包んで、ガラス戸をあけた。彼女は坂根の店へはじめて入った。

表の間には誰もいなかった。

「お留守ですか」

手島の細君は二階の方にきこえるようにいった。返事はなかった。と、奥の方から、高橋が出てきた。背むし男の高橋は、作業場の部屋からにゅっと顔をだすと、迂散くさそうに安子を見て、

「なんですか」

とひくい声できいた。ザンギリ頭の後頭部の出たのがいびつにみえた。

「奥さんいらっしゃいますか」

と安子はきいた。高橋はぬれた手を、染料で汚れた前かけでふきふき、表の間から二階へ上る階段下まできた。そうしてうす暗い中へ顔をつっこんで、

「奥さん、お客さんですよ」

としわがれた声でいった。と、二階から、たね子の応える小さな声がした。手島安子はほっとした。高橋に礼をいって、じっと待っていると、やがて、高橋は

奥に消えた。そのあとすぐ、とんとんと階段を下りる音がして、坂根たね子が、着物の前合わせをひろげ、だらしない姿で下りてきたのだった。

「ご気分でもわるいのですか」

と手島の細君は、たね子の蒼ざめた顔をみてたずねた。たね子はいくつもいじやになつたうしろ髪を手でなでつけて立っている。元氣のない眼をむけていた。

「ちょっと、軀がだるいんですのよ」

「それはいけませんね」

手島の細君は、もってきた鯨の包みを、そこに置いてから、特売品を買ってきたから召しあがれといい、なぜか、たね子とそこで話をしているのに気がひけるような雰囲気を感じたのである。何げなく気づいたことだったが、たね子とカウンターのようになつた仕切りの台をへだてて向きあっていると、先ほど奥の方に消えたはずの高橋が、まだスリガラスの向うにいるようだった。聞き耳を立てているようなのだ。うすくぼやけた背中のまるい影がうつっている。

「だるいって、お目出たじゃありませんか、だったら、

だるいのも当然ですよ」

手島の細君は口もとまで出たその言葉を出すのを止めた。彼女は、心なし、こつちを見て、うるんだような瞳をなげているたね子に向い、愛想わらいをすると、すぐに辞去した。

へどこかわるいんだ、きつとそうだな」

手島安子の判断は、翌日から町内の人びとの耳にいち早く流れた。

3

八月十六日。この夜は、燈籠流しだった。隅田川の上を、四角や丸型の木でつくった紙貼りの燈籠に灯をともして、遠くは駒形こまかたの橋げたの下あたりから、厩橋、蔵前、両国と、大川づたいに灯りを流す風習があった。燈籠の灯はまるで、螢火のように幾百となく、かたまりをつくって流れてくる。これを見物するために、両国橋、蔵前の橋上には、かなり人出が見られた。

柳橋の料亭では、川に面した棧敷にぼんぼりがとも

され、振袖姿の女たちがはしゃいでいる。物好きな客たちは、棧敷から船を出して、船頭に漕がせ、駒形までさかのぼる。そうしててんでに船にのせてきた白紙のままの紙燈籠に、思いをつづった文をしたためたり、あるいは、供養しなければならぬ近親縁故の物故者の名を記したりして、船から一せいに流してあそぶのだった。夏の名ごりを燈籠に流すといったような情緒もあって、この夜の大川端は、下町情緒が一だんと湧えるともいえた。

その夜の十時ごろである。両国にちかい柳橋の料理屋の一軒から、舟を漕ぎだした三人の客があった。四十四、五のでっぷりした男と、三十歳前後のそろって背の高い二人の男が乗っている。船は屋形船である。三人とも、かみしものように肩のしゃっちょこぼった浴衣を着ていた。

今しがた、駒形の方から流れてきた燈籠が、ゆつたりと柳橋の側の川つぶちを点々と流れ去った。その直後であった。まだ、一つ、二つ、どこかの橋げたにひっかかっていたらしい燈籠が、ちょうど群集からひと

足おくれてきたようなあんばいで、ぼつり、ぼつりと距離をへだてて流れてくる。その燈籠と逆行するように、三人の客をのせた船は、暗がりの中に櫓音をきしませて上へのぼった。

「先生」

若いほうの男が、肥満体の赭ら顔の男に、へつらうような物言いでも声をかけた。

「去年は先生は、言問の団子がたべたいと仰言いました……船頭さんに漕いでもらしまして、ずいぶん上流までいって燈籠を流したことをおぼえております。……いかがでございますか、今年も団子を召しあがりになりますか」

肥満体の男は微笑した。料亭でビールか何かを飲んでいたらとみえて、少し酔っている。息が臭かった。団子という言葉をきくと、この男は厚い唇を開いた。

「いたたかな」

と割れたような声をだした。

「船頭」

ひょろりとした男が、尻からげをしている船尾の男

に声をかける。

「言問橋までやってくれ、団子屋で団子を買いたいのだ」

「へえ」

船頭は櫓に力を入れた。

藏前橋は三日月を伏せたような黒い鉄の橋げたでできている。そこをくぐるとまたひとしきり、上流から流れてくる燈籠にゆき合った。やがて駒形橋であった。近くに浅草のネオンの灯がみえる。空が橙いろにうす明るく染っていた。

船は三十分もすると、吾妻橋をくぐった。すっかり冷えてくるようであった。喧躁な浅草の通りは、そろそろ車のクラクションも間遠になる頃で、夜更けの川の中は風が冷たい。言問橋の下に団子の店がまだ明りをともしている。船頭はつき出た棧橋に舟をこぎつけると、二人の若者と板敷きの上にほいと上った。

「先生、それじゃ、ちょっと買いにいってきます」

若い男二人が、浴衣の裾をまくって暗がりに消える。船の中は肥満体の男だけになって、静かな時間が

すぎていった。まもなく船頭をまじえた三人がもどってきた。また船は大きくかたむき、船の腹がぴたぴたと水音を立てていた。

「出来たてのがありましたよ」

と包みをほどこいた。机の上にひろげる。空のネオンを映した闇の中で白い包装紙がひらかれると、串にさした白い団子がならんでみえる。先生といわれた男は、口をあけて太い指の掌をにょきとどした。一本をつまんだ。と、この時であった。船頭が船の向きをかえようとして、うつむきかげんに竿をつかつて及び腰になったまま、不意に大声をあげたのだ。

「旦那、ちょっとマッチはありませんか」

「マッチ」

若いほうの男が、立って、船頭の方に屋根の下から首をのぼした。たもとからマッチを取りだしてわたしながら、

「もう、ここで燈籠を流すのかね」

「いや、旦那、あれ何ですかい」

気味悪いといったような声を出した。

夜目の中に、水の面が渦状の皺をつくって岸の方へ
のびている。そのびたびたと水音のする岸下に何やら
ぷっくり空気をふくんでふくれあがった布があった。

「人間のようですね」

船頭は舳^きにはいつくばって、マッチをすってみた。
瞬間、彼は声をたてずに、硬直した軀をそこに停止さ
せた。

女が死んでいたのである。断髪がうなじにかぶさっ
てうつ伏せになっていた。船の客は瞬時にして顔つき
がかわった。燈籠流しにきて、土左衛門を見たのだ。

肥満体の男も、ほかの二人も、大きく唇をふるわせ
て岸の方をにらんだ。

言問橋の上にある交番に船頭がかけこんだのが十時
五十分。まだ散歩客の多い川つぶちは大騒ぎになった。
巡査が二人きて、元氣のある若者が加勢して女の死体
をひきあげた。笹の葉模様の浴衣をきた死人である。

大柄で、色の白い女だった。まだ二十六、七と思われ
る。下着は何もつけていない。ひろげた内股を懷中電
燈に照らして巡査がゆっくり所見してみると、女はつ

っぱった片手を強くにぎりしめている。指の間から、
何やらゴム風船のちぢかんだようなものの端がのぞい
ていた。

「妙なものを握ってますぜ」

ぼつりと巡査の一人がつぶやいたのだ。自殺とも、
他殺ともわからない半裸にちかい死体だった。所轄の
浅草署に電話がかけられた。

4

言問橋の下、団子を売る店のあるコンクリートの
岸辺に、人だかりが多くなった。浅草署の宿直員が二
名と、鑑識係員と、それに橋詰の交番から巡査が二人
参加している。

ひきあげられた死体は泥くさい水をかぶっているの
で、おそらく着て出たときは洗いたての小ざっぱりし
たものであったろうと思われる浴衣が、べとべとにぬ
れて、泥のまじった水がしみこみ、死体の肌の白さを
強調するかのよう。いま、無様^{ぶざま}にひろげた女の足に

からみついていた。鑑識係は、無造作に着物の裾をめくり、巡査の照らす三つばかりの懷中電燈の中で、あらかたの所見をすませた。

「他殺か自殺かということははっきりいえませんが、自殺するにしては、ずいぶんだらしない恰好をしていると思います」

と年の若い係員は、ちょっと興味ありげな眼つきを
していった。

「だいたい、自殺する女は、身づくろいをきれいにするものなんです。下着もつけていない年頃の今式の娘じゃありませんからね。顔かたちからいって、どこかの商店の上さんのようなところもありますし、慎重にしらべてみる必要がありますよ」

同感だという風に、刑事連はうなずきあっていたが、
「手に握っている風船は妙ですな。何か、風船に関係のある店の女でしょうか」

「いや」

と一人の刑事が口を出した。

「子供に風船を買ってやるってこともありますからな。

年ごろは二十七、八じゃないですか」

「子供の風船を、手ににぎって死ぬっていうのもおかしい」

死体が暗い川岸に浮いたせいもあって、何やらかたんに処理できない様相をみせていることを、どの係官たちも感じたのである。女は大柄であった。白い餅肌をしている。乳房もまだ処女のようにふくらんで、経産婦のように黒ずんではないし、どことなく娘々したかんじがしないでもないのであった。

「お上さんだしたら、まあ若い方ですぜ」

と一人が、ぼつりといった。

「若い上さんが自殺する。ここまできて身投げしたのだとしたら、その団子屋だって気づくはずですからな。しかし、たずねてみても、笹の葉模様の浴衣をきた大柄な女はみとめていませんでした。ときどき、アベックが通ったそうですけれど、この女がアベックなり、一人なりで通れば、目につき易いだろうというんです。団子屋の灯は、ずいぶん、通りの向うまで照らしていますからね。今日は燈籠流しでもあるし、人出